

イスラエル滞在記

城崎進

エルアル航空機にて

一九七四年七月二十二日、私は、ミュンヘンからイスラエルのロッド空港（正式にはベン・グリオン空港）に向うエル・アル航空（イスラエル航空）の機中に在った。今どこの上空を通過しているか時折機長のアナウンスがあつたが、機外はほとんど日が没して、眼下の眺望は識別し難かつた。深く倒した座席の背に頭をゆだねながら、今朝からのことを想い返すと、私は苦笑が浮び上ってくるのを禁じ得なかつた。

その日の午前中、快適な観光バスでのミュンヘン市内見物を終え、ホテルで昼食を済ませ、かねてエル・アル航空事務所で指示されていた通り、離陸予定時刻の二時間以上も前にミュンヘン空港に着いた。ところが、空港カウンターでは、イスラエル行の乗客は一時間前に別棟のイスラエル行専用Cターミナルに集合とのこと。無為の一時間余の後、Cターミナルにおもむいたところ、その警戒の嚴重なこと。もちろん乗客名簿登録者以外は一步も建物に入れない。三重のチェックのたびごとに、渡航目的、定住地など同じことを質問されたが、もしヘブル大学のハーマン学長の招聘状を所持していなかったら、果して通過できたかどうか。

イスラエル滞在記（城崎）

学校から三ヶ月の短期外地留学の機会を与えられて、四月中旬最初の目的地アメリカのダラスへ向けて日本を発つ時から、最後の一ヶ月をイスラエル滞在に充てる予定はしていた。しかし、その時点では、前年十月の第四次中東戦争（ヨーム・キップール戦争）の収束がなお協議されている最中で、一触即発の状況が未だ継続していた。このため、アメリカ、ヨーロッパ滞在中に成行きを見定め、行ける状況なら行くことにしようと考えて、ヘブル大学からの招聘状だけは得ていたものの、出発前に在日イスラエル大使館に連絡さえもしていなかったのである。

事実、日本出発直前の四月十一日には、パレスチナ・ゲリラがイスラエル北部のキレヤテ・シエモーナを襲撃して二九名を殺傷したことが報じられていたし、五月十四日には、同じくパレスチナ・ゲリラがイスラエル北部のマアロト村の中学校を占拠し、生徒二十一人が死亡したという新聞報道を、ニューヨークのホテルで読んだことであった。もちろん、それらの直後、ゲリラの基地があるレバノン南部に対するイスラエル側の報復爆撃も繰返されていた。そのようなことで、ついにミュンヘン出発まで、一度もイスラエル国の出先外交機関に接触しないままにイスラエル行の航空機に乗込もうとしているのであるから、検査官が慎重であったのも無理はないかも知れない。

旅具検査では、カメラ、万年筆、化粧瓶、石鹼箱に至るまで全部中味をチェックする。「ミュンヘン滞在中誰から物品を托されなかったか。旅具は自分で詰めたか。その後誰かが旅具に近づく機会はなかったか」と、執ように尋ねる。つまり、アラブ・ゲリラ等が時限爆弾を仕掛けていないかを点検しているのである。「この検査は、関税やあなたに対する容疑のゆえではなく、あなた自身を含めての安全のためであるから、理解して協力して欲しい」と繰り返す。「もちろん、イスラエルの置かれている困難な状況はよく理解しているから協力を惜しむものではない」と、こちららも笑顔を造って繰り返して答えはしていたものの、最後に、下着一枚にされ、全身くまなく探りまわされたのに

は少々うんざり（しかし、帰国の際、ロッド空港を発つ時には、文字通りブリーフ一枚にされて、おまけにその中にまで手をつっこまれたのだから、ミュンヘン空港ではまだ寛大だったのかも知れない）。

これに先立つ約一ヶ月のヨーロッパ旅行の間、各地の空港ではほとんどフリーパスといってよかったのであるから、このコントラストは印象的であった。そういえば、ミュンヘンのエル・アル航空事務所の前には、ドイツ警察のパトカーが常駐し、事務所も、ドアはロックされ、呼鈴を押した客をいちいち確認した上でなければ入れなかった。

そして、イスラエル行の航空機は、広いミュンヘン空港の、一般機から遠く離れた一角で、厳重なフェンスとガードマンに囲まれて、バスで運ばれて来る我々乗客を待ち受けていたのである。

約束の地

私の座席の右隣りには、ユダヤ人の老婆が坐っていた。私のしゃべる英語とドイツ語らしきものは彼女には通じない。彼女のしゃべるヘブル語とドイツ語らしきもの（恐らくイーディッシュ）は私には通じない。しかし、彼女がヨーロッパのどこかから今イスラエルへ、恐らく初めて、帰るところだということは推測できた。黒っぽい質素な服装ではあったが、両手の指に宝石入りの指輪を沢山はめ、貴金属のペンダントやブローチを幾つも身につけて、決して貧乏人という感じではない。恐らく全財産を、そのような形に替えて身につけて来たものと推測された。

夕食の航空食が運ばれて来た。めいめいの盆の上には幾つかの料理が並び、パンも一つ乗っている。さらに、スチュードデスが、余分のパンを盛った盆を抱えて通路を歩いて来た。すると老婆はつと手を伸ばして、パンをもう二つ取った。やがて彼女は幾つかの料理とパンの一つを食べ終ると、残りの二つのパンと食べ残したデザートケーキや

イスラエル滞在記（城崎）

チーズの包みを手提の紙袋にしまいこんだ。ううむ、さすがにしっかりしている、と感心しながら、私も手をつけなかったパンとケーキとチーズの包みを彼女に進呈したら、「トダ・ラバ（有難う）」といってそそくさとこれも紙袋に納めた。そして、お礼のつもりか、時差があるから時計の針を進めるよう、手真似で私に注意してくれた。

やがて、「機は今テル・アビブ、ヤッフアの上空を通過中」との機長のアナウンスがあった。大急ぎですでに真暗になっている窓外をのぞくと、眼下に美しい街の灯が見えた。それと同時に、機内のスピーカーが、すばらしくビートニックな合唱を流し始めた。「ハレル、シャーレーブ、ハレルヤ」というような歌詞であったと記憶するが、その時は別の事をとられてしまっていたので定かでない。後の方に坐っていた一団のユダヤ人青年達が一斉に手を拍ち合唱し始めた。それと同時に、隣の老婆の両眼から大粒の涙が噴き溢れ始め、止まらなくなってしまった。そして、通路の向う側に坐っていた別の婦人と抱き合い肩を叩き合い大声で泣き出した。

彼女は今、約束の地に帰って来たのである。

時に主はアブラムに現われて言われた、

「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」（創世記一一・七）。

その約束が、今彼女に成就したのである。彼女のヨーロッパでの生活がどのようなものであったかは知るよしもない。しかし、想像はつく。ユダヤ人がパレスチナを追われて以来負い続けて来た苛酷な運命を、彼女もまた負いながら耐えながら生きて来たに違いない。旧約聖書学では、通常バビロニヤ捕囚の際に各地に散らされたユダヤ人のことを「ディアスポラ」と呼ぶ。しかし、ユダヤ人にとっては、約束の地パレスチナ、現在ではイスラエル共和国、以外に住むすべてのユダヤ人がディアスポラなのである。

われらは外国にあって、

どうして主の歌をうたえようか。

エルサレムよ、

もしわたしがあなたを忘れるならば、

わが右の手を衰えさせてください。

もしわたしがあたを思い出さないならば、

もしわたしがエルサレムを

わが最高の喜びとしないならば、

わが舌をあごにつかせてください。

(詩篇三三七・四一六)

これは、バビロニヤの捕囚民の歌である。同時に、全世界のユダヤ人の歌であった。そして、この老婆の歌であった。三〇〇〇年以上のイスラエルの歴史が、二〇〇〇年に近いユダヤ人迫害の歴史が、彼女の中に凝縮されているのである。そして、彼女は今、その約束の地に降り立つ。

入国手続、通関、両替などに手間どって、空港の外に出たのは、着陸後三十分以上経っていたであろう。そこで、私は彼女と「シャーローム」とことばを交して別れた。その時、彼女の両眼からは、まだ涙が流れ続けていた。

エルサレムへ

イスラエル滞在記 (城崎)

「テル・アビブのアビブ・ホテルへ」と私は告げた。丸坊主のいかにも精悍な感じのユダヤ人のタクシー運転手は、テル・アビブに向って車を走らせながら、私の予定を尋ねる。テル・アビブで一泊し翌朝にはエルサレムのヘブル大学に移るのだと告げると、それならばなぜエルサレムに直行せぬかと言う。ヘブル大学の宿舎に夜中に入る訳にはいかぬし、テル・アビブのホテルは予約してあるのだと言うと、エルサレムのホテルに泊まればよいし、テル・アビブのホテルはキャンセルすればよいと頑張る。

ロッド空港のことを一般にテル・アビブ空港というので、私は、空港はテル・アビブの市街に近いと考えていた。しかし、実際は、空港からテル・アラブは北西二二キロ、エルサレムへは東南東四六キロ、そして、翌朝はほとんど同じ道路を逆戻りして来ることになるのである。日本人的な律義さで、勝手に予約したホテルをすっぽかしては悪いと考えてためらっていた私も、ついに説き伏せられて、エルサレムに直行することにした。運転手は、満足そうに車をUターンさせた。

たしかに、運転手はエルサレムに私を運ぶことによってテル・アビブに行く倍の料金を得られたろうし、自宅がエルサレムにあったのかも知れない。そして、このようなことが、「ユダヤ人というものは……」という批評を生む機会になるのかも知れない。しかし、私には、彼が私のしようとしている浪費と不合理に我慢できなかったのだと思える。事実、私はこれによって、一〇〇イスラエル・ポンド以上（一万円近く）を節約できたのである。

エルサレムへの道のりは恐怖のドライブであった。完全に舗装された近代道路ではあるが、大部分は上下各一車線、夜中で対行車は多くはないとはいえず、そこを時速一五〇キロで吹っ飛ばし（法定制限速度は一般道路八〇―九〇キロ、市街地五〇キロ）、おまけに寸時も黙っていない。道路両側に残る数次の戦の跡を、時には窓外に手を伸べて

指示し、時としては振り返りながら説明してくれる。本当は真暗でほとんど何も見えないのであるが。一九六七年に彼が戦車兵として戦った古戦場にさしかかり、前車に追い越しをかけながら、いかに彼が勇敢であったかを振り向いて自慢し始め、対行車のヘッドライトが向って来た時には、思わず目をつぶってしまった。

ついでながら、私がイスラエルで貰ったガイド・ブックの「イスラエルでのドライブ」という項には、次のように書いてある。

「イスラエルの道路は雑踏しており、我々のドライバー達は——どうか彼らが皆一二〇才までも生きてほしいものだが——時として短気であり不注意であり衝動的である。従って、酔っぱらい運転は事実上皆無であるにも拘らず、イスラエルでの交通事故率は嘆かわしいほど高い。どうか気を付けて運転して下さい」。

「アラブも高価な犠牲をはらって戦争を仕掛けたりテロをやらなくても、イスラエル人全部に一台つつフォルクス・ワーゲン持たせてやればよいのに。そうすれば、二年で問題は全部片付いてしまうのに」。

運転手の紹介するエヤル・ホテルに着いたのは、ほとんど十一時近かった。部屋のテレビのスイッチをひねると、ヘブル語とアラビア語のスーパーインポーズ付の英語版「鬼警部アイアンサイド」が始まるところで、何となく一時間入り込んで見終ってしまった。この二ヶ月間、アメリカでもヨーロッパでも、ほとんどテレビを見る機会がなかったのである。イスラエルで、一時間以上もテレビを見続けたのは、その後世界サッカー選手権の決勝、西ドイツ対オランダ戦だけである。その時には、ヘブル大学の教授クラブのロビーに集った数十人のほとんど全員がオランダに声援していたことが印象的であった。イスラエル全土でも同様であったと、翌朝のエルサレム・ポスト紙は報じてい

た。

エルサレムでの第一夜は、自分は今エルサレムの街の一角にいるのだという想いに、柄にもなく容易に眠りに入らなかった。

ヘブル大学

七月二十三日、タクシーで、ヘブル大学のギヴァット・ラム・キャンパスへ。正門では、腰に拳銃をさした守衛二、三人で、入構者すべての所持品検査をしている。私も、スーツ・ケース、ショールダー・バッグの内容物点検を受ける。尤も、この所持品検査がかなり形式的なものであることは段々分って来たし、ことに、私が学長の招待を得て来ている客であることを知ってからは、ほとんどフリー・パスに近くなった。いうまでもなく、広大なキャンパスは、上縁に有刺鉄線のついた高い金網のフェンスで囲まれ、徒歩者は正面からしか出入りできないし、別にある二ヶ所の車の出入口も遮断機があつてチェックを受けなければならない。それでも、私の行く暫く以前に、大学内のカフェテリアで、ゲリラの仕掛けた時限爆弾が炸裂して、学生の死傷者が出たということ、後に聞かされた。

構内で、青山学院大学神学部出身で、すでにこのヘブル大学の博士課程で五年以上も研究している池田裕氏の出迎えを受け、その案内で教授クラブ、ベルギー・ハウスに入る。

このベルギー・ハウスというのは、主として諸外国から客員教授として招かれヘブル大学で教鞭をとる人々のための宿舎で、バス、トイレ付きのホテルなみの快適な居室が十数室あり、さらに立派な食堂、集会室、ロビーが付設され、それらは専任の教授たちも利用しているようであった。私は、大学に対して何の貢献もしないにも拘らず、学長

の招待客として（もちろん宿泊費は支払ったが）、約一ヶ月間、地方への旅行期間中を除いて、ここで寝食する特権を享受したのである。

エルサレムのヘブル大学は、一九七二―三年度の在籍学生数一七、五〇〇名、内五、五〇〇名は大学院生で、その中の一、四〇〇名は博士課程である。また約四、〇〇〇名の海外からの留学生も在籍している。教員数は、教授二〇〇名、助教授二五一名、講師五七二名、医師三四名、嘱託講師・助手等六九四名、フェロー五〇名、合計一、八〇一名に及ぶ。

組織としては、人文学、社会科学、自然科学、農学、医学、歯学、法学、教育学、応用科学・工学の九学部と附属病院、それぞれの学部の多数の付設研究所、および図書館学、社会事業、保健栄養学、薬学、外国人学生のための各付設学校、予備教育、科学教育、成人教育、ディアスポラ教育のための各センター、国立図書館兼用の中央図書館、大学出版社を擁する堂々たる総合大学である。

それぞれの学部は広般な学科・専攻部門を持ち、人文学部を例にとれば、ユダヤ学、現代ユダヤ学、アジア・アフリカ学、哲学、歴史学、地理学、考古学、言語・文学、芸術学に分れている。さらに、ユダヤ学一つをとりあげても、聖書学、ヘブル語、ヘブル文学、ユダヤ思想史、ユダヤ民族史、ユダヤ哲学・カバラ、タルムード、イーディッシュ、ユダヤ民話の各部門と二つの総合コースに分れ、さらに、一六の研究プロジェクトを抱えている。何しろ、ユダヤ学のみで、名誉教授一〇名、教授二〇名、助教授一七名、講師二〇名、嘱託講師・助手一八名、フェロー四名という大所帯である。

キャンパスは、本部および人文学部、社会科学部、自然科学部を主とするギヴァット・ラム（敷地は南北約一、五

〇〇メートル、東西約六〇〇メートルの丘陵地)、法学部等を中心とするスコボス山キャンパス(ギヴァット・ラムよりやや狭いが山一つ全部が山麓を含めてキャンパスで、なお拡張中)、医学部および病院を中心とするアイン・カレム・キャンパス、農学部のあるレホヴォテ・キャンパスの四ヶ所に分れている。それぞれに近代的な学生用アパートが多数付設されている。しかも、これらのキャンパスにおいて、大学施設は目下大々的に拡張充実されつつある。

ヘブル大学も、イスラエルの他の六つの大学と同じく、私立大学である。この大規模かつ豪華な内容を誇る大学の財政がいかにして賄われているかは、非常に興味のある所である。具体的な実数については知り得なかったが、経費の六〇〜七〇%が政府資金、二〇〜三〇%が寄附財団を通しての寄附金、学生納付金の占める割合はわずかに一〇%とのことであつた。政府資金は、ユニヴァーシティ・グラント・コミッティーによって割当てられ、教学内容に関する政府の干渉は全くないと、ハーマン学長は私に断言された。

さらに、私をして羨望措く能わざらしめたのは、大学のすべての建物が、主として海外からの寄附金によって建てられていることである。世界各地にあるヘブル大学後援団体を通じて、あるいは個人、法人からの、巨額な資金が送られている。大学の建物は、その一つ一つに寄附者または団体の名が付けられている。たとえば Joseph and Sadia Danciger Building for Solid State Physics Research; South African Friends Geology Building; Students Centre by Women's League for Israel という式で、さらに、小額の寄附金を受けた人々の名前も、全部美しいプラスチックの名札に刻まれて建物の壁面を飾っている。毎日のように、世界各地からの見学者が大学を訪れ、大学は専任のツアー・ガイドを置いて学内を案内しているが、建物の壁面に自分の名前を発見した人々は、一層後援の意欲を燃やすことであろう。

大学に関して紹介したいことは尽きないが、際限がないので、最後に大学の歴史について一言して終りたい。

一九世紀の終り、ロシア国中をポグロム（反ユダヤ運動）の嵐が吹き荒れ、一方ユダヤ人のパレスチナ入植が始められていた頃、ハイデルベルグ大学のヘルマン・ツヴィ・シャピラ教授が、ヘブル大学設立を提唱する一連の論文を書いた。一九〇二年、ハイム・ワイツマン博士、マルテン・ブーバー博士、ベルトレット・ファイウエル博士が、大学設立の詳細な具体案を作成し、それがロスチャイルド男爵やシオニズム運動の指導者達の支持を得ることとなった。一九一四年に、大学の中心用地として、スコポス山の一部分が購入されたのであるが、第一次大戦に妨げられたため、イスラエル十二部族を象徴する十二個の礎石がこの地に置かれたのは、一九一八年七月二十四日であった。この定礎式の際の、ワイツマン博士の講演の一部を次に紹介する。

こんなに人口の乏しい地で、すべてのことが未だ中途半端な地で、鋤や道路や港湾のような簡単な物が切に求められている地で、精神的・理的発展のセンターを創り出すことからまず手をつけるということは、一見パラドキシカルに見える。しかし、ユダヤ人の魂を知る者にとっては、それは決してパラドックスではない。重大な社会的・政治的課題が我々に直面し、我々にそれらの解決を要求していることは事実である。しかし、心が完全に機能し、ユダヤ人の自覚の発展のセンターを持つならば、その時こそ、我々の物質的・必要の充足も同時に獲得するであろうことを、我々ユダヤ人は知っているのである。

一九一八年から、化学、微生物学およびユダヤ学の研究所が次々に開設され、大学は事実上活動を始めていたが、正式の大学開設式は、一九二五年四月一日に、スコポス山上の野外劇場で、ワイツマン博士の司式の下に挙行され、そこには英国のバルフォア卿も出席し講演している。当初研究機能のみであった大学は、一九二八年からは教育機能

をも持つようになった。そして、独立の年一九四八年には、前記三研究所の他に、文理学部、医学部の前身、農学部、教育学部、図書館、博物館などが開設され、開学当時の教員三三名は今や一九〇名に、学生は一六四名から一、〇二七名に増大していたのである。

一九四八年五月十四日の、イスラエル共和国成立と同時に、イスラエルのほとんど全土で、アラブ側との戦乱が起った。エルサレムのユダヤ人地区からスコ-pos山のヘブル大学および病院への道路は、途中アラブ側地区を経なければならず、国家成立直前の四月十三日にも、すでに途中でアラブの攻撃を受けて七七名が殺害される事件が発生していた。このため、スコ-pos山のキャンパスは、以後一九年間放棄され、大学の研究教育の機能は、エルサレム市内のフランシスコ派修道院その他の建物に分散して遂行されなければならなかった。しかし、この間にも、大学の発展は継続され、一九五八年には、ギヴァット・ラムの新キャンパスが開設された。

一九六七年の六日戦争により、旧ヨルダン側エルサレムもイスラエルの統一下に編入された結果、スコ-pos山キャンパスが再開され、以後飛躍的発展を見せている。最終的には、ギヴァット・ラム・キャンパスには、自然科学、応用科学の研究教育機関のみを残し、本部、中央図書館、学生センター、教授クラブ、競技場、人文科学・社会科学関係の諸学部のすべてが、スコ-pos山キャンパスに集中される予定である。

ヘブル大学は、世界でも有数の大規模かつ充実した大学であり、日本でこれに比肩し得る大学は東京大学を措いてない。しかし、そのこと自体は必ずしも驚きに値しない。我々の刮目すべきは、国家設立に半世紀先立って大学設立が建議され、三十年先立って礎石が据えられ、二十三年先立って正式に開学されている事実である。

もちろん、この事実をもって、シオニストの露骨な侵略の意図の現れであるという見方もあろう。しかし、準備さ

れ開設されたのは、保塁でも要塞でもなく、研究教育機関としての大学なのである。イスラエル共和国設立に伴う戦乱は、全く不幸な出来事である。しかし、それを惹起したのは世界各国の、もちろんイスラエル、アラブを含めての、政治家の責任である。民族・国家の基盤が研究教育であるという、ユダヤ人の卓見と実行力の前には、敬服脱帽するほかはない。

一九四八年、スコ-pos山キャンパスが閉鎖される日、大学と街とを結ぶ最後の九番系統のバスがキャンパス前を出発する時、人々は涙にくれながらこれを見送った。一九六七年、その同じバスが、再開第一号の九番系統バスとして、再開されたスコ-pos山キャンパスに到着した時、人々は歓声をもってこれを迎えたという。しかも、その再開第一号バスの運転手は、戦乱中に戦死した中断前最終のあのバスの運転手の息子であったという、感動的なエピソードも聞かされた。

エルサレム滞在中、私も、現在二つの主要キャンパスおよび中心市街をつなぐ最短路線である九番系統バスを、何度となく利用したことであった。

シャバット（安息日）

ベルギー・ハウスでの最初の朝食時、隣席のプリンストン大学から来ていたフランス文学の客員教授が、初対面の自己紹介を交したあと、語りかけて来た。

「君はエルサレムに来てから、もうシャバットを経験したかい」

「いや、未だだ。一昨日イスラエルに着いたばかりだから」

イスラエル滞在記（城崎）

「じゃ、気を付けろ。さもないと、シャバットには死にかねないぞ (You could die)」

ユダヤ教の安息日は、金曜日の日没から土曜日の日没前までである。ユダヤ教の律法は、安息日には一切の労働を禁じている。この日には、火を起すことも禁じられているので、炊事はできない。正統派のユダヤ教徒は、電灯すらも前日からともしておくか、ユダヤ教徒以外の人に点灯を依頼するほかはない。北部旅行中、地中海沿岸の町ナハリヤのホテルでは、シャバットにはロビーで喫煙しないでくれという注意書を見た。

従って、食堂を含めて一切のユダヤ人の商店は完全に休業で、エルサレムの主要交通機関であるエゲドと呼ばれるバスも走らない（但し、アラブ人地区である東エルサレムおよびその近郊を走るアラブのバスは運行している。イスラム教徒の安息日は金曜日）。タクシーや自家用車は走っているが、数は平日よりもずっと少い。シャバットに、メア・シェアリームと呼ばれる保守的なユダヤ教徒の居住区域を車で通りかかると、石を投げつけられることがあるという。

金曜日の夕刻になると、大学でも正門を閉鎖し、広大なキャンパスの中は、通用門の守衛と学生ヴォランティアらしい数人の保安要員以外は、人っ子一人姿を見せなくなる。大学内に幾つかあるカフェテリアはもちろん、ベルギー・ハウスの食堂も閉鎖する。従って、シャバットに宿舎に留まろうと思えば、前以て自分で食糧品を買込んでおくか（但し自炊の設備はない）、金曜日の午前中に食堂に注文しておいて、金曜日の夕食、土曜日の朝食、昼食の弁当をアラブのボーイに届けて貰わなくてはならない。もしこれを忘れると大変。宿舎の受付も電話交換台も閉鎖しているから、外部との連絡がとれない。旧市内や東エルサレムまで行けば、アラブ人やクリスチャンの商店が賑やかに営業しているのだが、バスが走っていない。バスで約四〇分かかる道のりを歩くか、勇気と好運を持ち合わせておれば、

走っている自家用車をヒッチハイクするほかはない。幸い、私は、シャバットには、池田氏宅に泊めて頂いて旧市内のアラブ人の店で買物させて貰ったり、大学の教授宅の食事に招かれたりする機会が多く、また最初の警告のおかげで弁当の注文を怠らなかったので、一度も心ならずもの断食を経験することはなかった。

ベルギー・ハウスの食堂で同席した二人の客員教授——一人はソルボンヌ大学からの老教授、一人はアメリカから来た心理学の少壮教授——が議論していた。

ある保守的なラビが、ユダヤ人の青年の一人を引率してフランスに旅行した。ユース・ホステルに到着したのが金曜日の夕刻、シャバットの始まる直前であった。ラビは、青年達に、シャバットの心得を懇々と言い聞かせた。シャバットになり、やがてラビは小用を足すため、トイレットに入った。ところが、電力節約のためヨーロッパではよくある仕掛なのだが、トイレットの戸を開けるとパツと電灯がついた。ラビはびっくり仰天した。律法を厳しく守っている彼は、自分で電灯をつけた覚えはないのだから。何度か戸を開閉してみてもその仕掛を知ったラビは、さっそく全員をトイレに集合せしめ、これはシャバットの戒めを破ることになるかどうか、トイレットを使用してもよいかどうかを、数時間にわたって議論したという（聖書の律法やタルムードの教えについて議論することは、シャバットに奨励こそされ、これを犯したことはない）。

老教授は、その話は誇張されたジョークにすぎないとし、少壮教授は、いや実際に有り得る話だと主張し、ついに二人とも最後まで自説を譲らなかった。

一九七三年十月六日に、イスラエルはシリヤ軍とエジプト軍によって奇襲攻撃を受け、緒戦において手痛い打撃をこうむり、頽勢を挽回するためには非常な犠牲を払わねばならなかった。この戦いで、三〇〇〇人以上の有為な青年

が死傷し、ヘブル大学自身も多数の優秀な学生・教員が再びキャンパスに還らなかつたのだ、という嘆きを、私は何度聞かされたことか。十月六日は、シャバット中のシャバットといわれる、ヨーム・キップール（贖いの日）であり、軍人を含めて、全イスラエルが業をやめて、それぞれの家庭で断食を守っていたのである。このことが防戦の態勢をとることをいちじるしく遅らせたことは明白である。

この件について、私は、あるユダヤ人の学生——彼自身も銃を執って戦に参加した——と話したことがある。「日本も、日曜日の早朝パール・ハーバーを奇襲攻撃した。いわばそれは戦いの常道ではないか。それに、ユダヤ人は、ローマのポンペイウス將軍の時以来何度もシャバットに奇襲を受けて痛い目に会った経験があるではないか。国防が大切なら、どうしてももう少しシャバットに関して柔軟な措置をとれないのか。」彼は、あの戦いの後に大部分のイスラエル国民がそうしたように、一九六七年の六日戦争における大勝で慢心した軍事指導者や世界一と自己共に評されて過信に陥っていた情報部の怠慢の責任を口をきわめて追及した。しかし、シャバットに関しては、こう言った。「シャバットを守る者は、シャバットに守られるのです。現に今回もそうなたじやありませんか」。彼は、サブラ（パレスチナ生れのユダヤ人）ではあるが、タルムード学科の学生でもメア・シェアリームに住人でもない。有機化学を学んでいる普通の学生である。

もし安息日にあなたの足をとどめ、

わが聖日にあなたの楽しみをなさず、

安息日を喜びの日と呼び、

主の聖日を尊ぶべき日となえ、

これを尊んで、おのが道を行わず、

おのが楽しみを求めず、

むなしい言葉を語らないならば、

その時あなたは主によって喜びを得、

わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、

あなたの先祖ヤコブの嗣業をもって、

あなたを養う。

これは主の口から語られたものである。

(イザヤ書五八・一三一―一四)

コーシエル

忌むべき物は、どんなものでも食べてはならない。あなたがたの食えることができる獣は次のとおりである。すなわち、牛、羊、やぎ……など、獣のうち、すべて、ひずめの分れたもの、ひずめが二つに切れたもので、反芻するものは食えることができる。ただし、反芻するものと、ひずめの分れたものうち、次のものは食ってはならない。すなわち、らくだ、野うさぎ、および岩だぬき……。また、豚、これは、ひずめが分れているけれども、反芻しないから、汚れたものである。その肉を食ってはならない。またその死体に触れてはならない。

水の中にいるすべての物のうち、次のものは食えることができる。すなわち、すべて、ひれと、うろこのあるもの

イスラエル滞在記 (城崎)

は、食べることが出来る。すべて、ひれと、うろこのないものは、食べてはならない。これは汚れたものである。すべて清い鳥は食べることが出来る。ただし、次のものは食べてはならない。すなわち、はげわし、ひげわし……ペリカン……こうもり。またすべて羽があつて這うものは汚れたものである。それを食べてはならない。すべて翼のある清いものは食べることが出来る。

すべて自然に死んだものは食べてはならない……あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。子やぎをその母の乳で煮てはならない。(申命記一四・三一―二一。レビ記一一章参照)

私は、神学校で旧約聖書を教えているのであるから、ユダヤ教の律法に食物に関する戒律規定のあることは、もちろん知っている。教室で、学生にそのことを教えてもいる。「子やぎをその母の乳で煮てはならない」という戒律は、かつて考えられたようにヒューマニズムに基くものではなく、カナンの異教的祭儀の拒否なのである、と説明していた。また、食べてうまいものは大体食べてよい方に分類されている、どのみち岩だぬき、はげわし、ペリカン、こうもりなど、もともと食べたいようなものではない、ただ一つの例外は豚であるが、きつと昔さなだ虫に悩まされた結果こういう禁令が生れたのであろう、などと講義していた。二〇数年前、ニューヨークに留学している時、ユダヤ人の肉屋の店頭に、「バーサール・カドーシュ」(聖い肉、すなわち律法にかなった種類の律法にかなって処理された肉のこと)という、ヘブル語の看板がかかっているのを見て、ほほうと感心したこともある。しかし、この律法を厳重に守っている人々の社会の中で生活したのは、今回が初めてである。そして、それが、少くとも我々日本人にとって、どれほど苦痛であるかを経験させられたのである。

食物に関する律法規定に従って調理された食物のことを「コーシエル」と呼ぶ。元来、「適法な」という意味のへ

ブル語である。さらに、コーシエルを供する食堂のことも、コーシエルと呼ばれている。ベルギー・ハウスの食堂も、大学内のカフェテリアも、もちろんコーシエル、各地の旅行中もいつもユダヤ人集団と一語であったから、常にコーシエル、教授のお宅に招かれたときもコーシエル。もちろん、エルサレムでもそれ以外の所でも、アラブやクリスチャンの店は、コーシエルではない。

しかし、私は、イスラエル滞在中、頑固にコーシエルで通した。アラビヤ語ができないし、アラブ地域に一人で入ることがためられたことも一つの理由である。イスラエルに来る前に、ヨーロッパ、それも主としてフランス語圏で悩まされた、種類と料理法がやたらに饒舌で、注文しても現物が来るまで何物であるか分らなかったフランス語のメニュー（一度はロースト・ビーフと見当をつけて注文したら生肉のソースあえが来たことがある）に対する反動もあつたかも知れない。しかし、主として、折角イスラエルに来ているのであるから、イスラエル風でと考えていたのである。何回かの例外は、池田氏宅でご夫人の手料理のご馳走に与った時のみである——白いご飯、刺身、えび、ハム、野菜のおひたし、漬物、味噌汁、日本茶の何とおいしかったことか。ついでながら、長旅で胃腸の具合の悪くなっていた私には、池田氏が下さった「わかまつ錠」と「正露丸」は、まさに宝物であつた。

トンカツ、ポーク・ソテー、ハム、サラミ、みな駄目である。肉食は牛肉またはチキンあるいはターキーが主である。牛肉ならば結構ではないかとお叱りを受けそうであるが、血のしたたるようなビーフ・ステーキとはいかないのである。日本のステーキ・ハウスで、血やジュースを逃さないようまず両面を軽く焼いてなどというのは訳が違ふ。申命記一二・二三其他の律法に従って、すべて脱血してから料理してあるので、ステーキでもシュニツルでもパサパサである。さらに、前記の規定のゆえに、牛肉料理の時には、牛乳を飲むことも、デザートにアイスクリーム

を味わうことも許されていないのである。

日本通の一教授が「城崎先生、エルサレムには中国料理店は二軒あるけど、日本料理店はまだ一軒もないから、あなたがヘブル大学に来て研究を続けながら、日本料理店を開いたらいかがですか」と冗談を言ったことがある。私は、「えび、かに、しゃこ、たこ、いか、うなぎ、あなご、はも、かき、赤貝、あわび、はまぐり、うに、なまこを食べないイスラエル人に、一体どんな日本料理を食べさせられるんだい」と笑って答えた。

もちろん、軍隊のような大集団では、安価で高度な蛋白質源である豚肉を全く用いないのは不経済なので、ある程度供用していると聞いたことがある。しかし、その場合でも、鍋や皿は別の料理の場合と、いちいち取り替えるという。また、非ユダヤ人の集団の中で生活している時には、それほど神経質に食事規定にこだわってはいないという。たとえば、日本で大変ポピュラーな中国風焼きめしを出されて、いかや豚肉をいちいち皿の外につまみ出して食べる訳ではない。だいいち、そんなに完全に律法を守るものなら、ぎんげの祈りや贖いの日は必要でないともいえない。

しかし、ユダヤ人、ことにイスラエルに住んでいるユダヤ人が、シャバットやコーシエルによって、何と自由や人生のバラエティーや豊かさを失っていることか、と我々非ユダヤ人が同情するとするならば、それは全くお門違いと言わねばならない。彼らは、少くともそれを重荷であるとか桎梏であるとかは考えていないのである。

トリーターの民

主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ、

主のあかしは確かであって、無学の者を賢くする。
主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、
主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする。
主を恐れる道は清らかで、とこしえに絶えることがなく、
主のさばきは真実であって、ことごとく正しい。
これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、
また蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも甘い。
あなたのしもべは、これらによって戒めをうける。
これらを守れば、大いなる報いがある。
だれが自分のあやまちを知ることができましようか。
どうか、わたしを隠れたとがから解き放ってください。
また、あなたのしもべを引きとめて、
故意の罪を犯させず、
これに支配されることのないようにしてください。
そうすれば、わたしはあやまちのない者となって、
大いなるとがを免れることができますでしょう。
わが岩、わがあがないぬしなる主よ、

イスラエル滞在記（城崎）

どうか、わたしの口の言葉と、心の思いが、あなたの前に喜ばれますように。

(詩篇一九・七―一四。一一九篇参照)

族長時代や士師時代は別として、ダビデ王国に始まるイスラエル共同体のパレスチナにおける生活は、一〇〇〇年余で終わった。紀元七〇年、ローマによってイスラエルの地を追われたユダヤ人は、ディアスポラとして、世界中に離散した。しばしば誤って伝えられるようにパレスチナからユダヤ人が完全にいなくなった時期というものはないのであるが、パレスチナは、その後常に他民族あるいは他国の支配下におかれ、そこでのユダヤ人はきわめて少数者でしかなかった。

一八〇〇年後の一九四八年、そのパレスチナの一部に、イスラエル共和国が再建された。これは歴史の奇跡といえはかない。もちろん、それは先進国間のもろもろな思惑のからんだ政治的所産であるということも事実である。しかし、このイスラエルを自分の国として、再建のためにあらゆる種類の努力を惜しまないユダヤ人が、現在世界中に約一、二〇〇万おり、その中の約二七〇万がイスラエルの地に帰って来ているということが奇蹟なのである。行政的に国土が与えられたとしても、そこを自分の国と考える民が無ければ、そもそも国家は成り立ちようがないではないか。

世界各地に散らされたユダヤ人達は、一八〇〇年の間に(バビロニア捕囚時のディアスポラまで含めれば二、五〇〇年)、居住地も、国籍あるいは市民権も、言語も、皮膚の色も、人種さえも、ほとんどあらゆる種類のものを含むものになっている。しかし、彼らは、なおユダヤ人であり続けたのである。もちろん、それぞれの社会や文化や宗教に同化吸収されてしまった少数のユダヤ人がないではない。しかし、それは、ほとんど言うに足りない例外にすぎない。

い。しかも、主としてヨーロッパにおいてユダヤ人に加えられた一八〇〇年にわたる迫害の歴史を想うと、このことは、奇跡的としか評しようがない。

この奇跡を可能にしたのは何なのか。端的にいつて、それはトーラーである。トーラーは普通「律法」と訳される。しかし、ユダヤ人にとっては、それは彼らの聖書（キリスト教会のいう旧約聖書）全体をも意味し得るし、また生活における具体的な適用においては、トーラーの註解書であるタルムードをも含んで来る。トーラーこそ、一八〇〇年にわたってユダヤ人をユダヤ人であり続けさせたものであり、今日も全世界のユダヤ人の心と業とを約束の地に再建されたイスラエルにつないでいる絆なのである。ユダヤ人であるということと、ユダヤ教徒であるということ、トーラーを守って生きるということは、事実上同義語と考えてもよい。

ある一日、有名な嘆きの壁の前の広場で、白いユダヤの晴衣をつけ、キツパを頭にした男の子を肩車にのせた大人と、それを囲む数十人の男女が、角笛や大鼓や鐘を鳴らし、唱い、奇声を発して、踊りまわっている光景に出会った。その踊りぶりには、阿波踊りに似ているが、法も何もなく、むしろ恍惚の踊りに近い。そうした一団が、次から次へと広場に繰り込んで来る。他の人々は、その男の子めがけて、キャンディーなどを振り注ぐ。あれは何かと尋ねた私に、ガイドは答えた、「バル・ミツワー」。

バル・ミツワーの行事は、日本流に言えば、元服式である。ユダヤ人は幼児の時から、親やラビを通して、トーラーの教育を受ける。十三才になると、男の子は、ラビの試問と祝福を受けて、一人前のユダヤ人になる。一人前のユダヤ人とは、トーラーによって生きる人間ということなのである。このゆえに、親や親族たちには、この上もなくおめでたい日であり、人々もキャンディーなどを振り注いで祝福するのである。

このトーラーの絆のゆえに、世界各地のユダヤ人は、一九四八年の建国以前にも、ユダヤ人のパレスチナ入植のための土地購入資金を援助し、建国時の戦乱を、物心共に支援して、奇跡的な勝利（いや、生き残りというべきか）を可能にし、それ以後の近代的国家建設の政治的・経済的基盤を支え続け、また、前述のように、ヘブル大学の建設と発展を担って来たのである。

どのように居住地、国籍、言語、皮膚の色、人種さえも異にしていようと、トーラーを持ち、それによって生きることこそ、ユダヤ人がユダヤ人であることのアイデンティティーなのである。

愛は律法を完成する

ひるがえって、我々クリスチャンがクリスチャンであることのアイデンティティーは何であろうか。いうまでもなく、それは、イエス・キリストによって示された愛であろう。

互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあつてはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」など、そのほかに、どんな戒めがあつても、結局「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というこの言葉に帰する。愛は隣りに害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである。

（ローマ人への手紙一三・八一―一〇）

旧約学の学徒として、当然私はイスラエル古代史を学んできたが、正直なところ、以前は紀元後のユダヤ史、ユダヤ教には関心を持っていなかった。ところが、一九六七年の第三次中東戦争以来、中東問題について解説を依頼され

る機会が多く、このために紀元後のユダヤ人の歴史を多少とも学びはじめた。ことに、近年、日本における部落差別の問題と関わりを持つようになり、これとの対比で、とくにユダヤ人の歴史に関心を深めることになった。

ここでユダヤ人の歴史を紹介する紙数はないが、端的に、ヨーロッパにおける一、八〇〇年のユダヤ人の歴史は、キリスト教によるユダヤ人迫害の歴史であったと言っても言い過ぎではない。人々の目は、第二次世界大戦中ナチによってアウシュヴィッツその他で行われた、六〇〇万のユダヤ人大虐殺のみに奪われて、それ以前のことについて余りにも無知である。試みに、ごく主要な迫害事件のみを次に列挙してみる。

七〜九世紀 ビザンチン帝国のユダヤ人強制改宗（拒否は追放、迫害、死を意味する。このことは、この後のすべての件にあてはまる）

- 一〇九六年 十字軍によるヨーロッパ諸都市におけるユダヤ人虐殺。
- 一〇九九年 十字軍によるエルサレムのユダヤ人虐殺。
- 一二九〇年 イギリスからのユダヤ人追放。
- 一三〇六年 フランスからのユダヤ人追放。
- 一三九一年 スペインのセヴィリアにおける数千のユダヤ人虐殺。スペイン全土で強制改宗。
- 一四世紀中期 ハンガリアからのユダヤ人追放。
- 一四二一年 オーストリアからのユダヤ人追放。
- 一四九二年 スペインからのユダヤ人追放（少くとも一五万）。
- 一四九五年 リトアニアからのユダヤ人追放。

一五四一年 ナポリ王国からのユダヤ人追放。

一七世紀中期 ポーランドにおける一〇万のユダヤ人虐殺。

一八世紀 ロシアからのユダヤ人追放。

一九世紀後期～二〇世紀初期 ロシアにおける各地での追放またはゲットー入り。とくに南ロシアにおけるポグロム（反ユダヤ運動）の嵐。

このような略表は、きわめて不完全にしか全貌を表現し得ない。読者は、せめて、シーセル・ロス著「ユダヤ人の歴史」（みすず書房）一冊だけでもよいから読んで頂きたい。

前記のユダヤ人迫害の多くについて、時代や地域からいって、当然カトリック教会およびカトリック教国がその主体となっているが、プロテスタント教会も決して責任を脱れ得ない。宗教改革者マルチン・ルター自身、最初はローマ教会に迫害されて来たユダヤ人に好意的であったが、ユダヤ人が容易にキリスト教に改宗しないことを知った晩年には、シナゴークの焼払いやユダヤ人の追放を奨励するようになっていたのである。

もちろん、私も、これらのユダヤ人迫害の要因が、純粹に宗教的なものであると考えるほど問題を単純化している訳ではない。それぞれに、政治的・社会的・経済的要因がからみ合って起ったものであることはいうまでもない。しかし、それらの政治的・社会的・経済的要因のすべての背後に、「ユダヤ人だから……」という差別が根底的に横たわっていることを否定できない。そして、その差別の真因は、結局キリスト教の生み出した宗教的なものである。

すなわち、それは、歴史的イスラエルは、神の選びにも拘らず、これに背いたため、神に捨てられ、キリストの教会がそれに代る新しいイスラエルとして選ばれた、というキリスト教の信仰であり、その神学である。私自身も、以

前に書いた論文の中に、そのような表現を用いている。従って、圧倒的にキリスト教の影響下におかれたヨーロッパの人々の間に、ユダヤ人はキリスト教に改宗せぬ限りは神にまつろわぬ民であり、亡ぶべき者であるというユダヤ人観が抜き難く定着したのはきわめて自然である。

たしかに、日本ではユダヤ人迫害は起っていない。それは、たまたま、日本にユダヤ人がきわめて少い事実と、日本のキリスト教会が極端にマイノリティー集団であって自己保存に精一杯の状況であるからに過ぎない。日本の教会の立っている信仰的・神学的基盤が、欧米のそれを継承して、反ユダヤ的なものであることにおいては全く同然である。

イザヤ・ベンダサンは、その著「日本人とユダヤ人」の中で、「目には目を……」という申命記の律法が復讐許容の規定と誤解されていることに触れて、次のように書いている。

彼ら（キリスト教徒）は言う「ユダヤ人は復讐を公認した。しかしキリストは右の頬を打たれたら左の頬を出せ」といった。キリスト教はユダヤ教の復讐公認を否定した愛の宗教である」と。御立派である。二千年間、そのようにユダヤ人に実行してくれたら、私は何もいわずに頭を下げよう。だが忘れないでいただきたい。「右の頬を……」という言葉も、旧約聖書からの（広い意味での）引用であることを。「おのれを打つ者に頬を向け、満ち足りるまでに、恥かしめを受けよ。口をちりにつけよ、あるいはなお望みがあるであろう」というエレミヤ哀歌の一節であることを。キリスト教徒よ、これを実行してきたのは、あなた方ではない。私たち、ユダヤ人なのだ。

（一六九頁以下）

この言葉の前に、私は一言もない。イスラエル滞在中、こちらから切り出した場合以外、ユダヤ人の側からこの種の

話題について語りかけられたことは、一度もない。このことが、かえって私を苦しめた。我々は、ユダヤ人の前に立つ時、一体どのような顔をして、頭書のパウロの言葉を引用して、「愛は律法を完成するものである」と言えるのか。

私の尊敬するきわめて敬虔なクリスチャンであり、すぐれた思想家であり、有能な教育行政家でもある方が、最近自分のした放送講演をある同人雑誌に再録している。彼は、その中で、オーストリアの心理学者ヴィクトール・フランクルの著書「夜と霧」をとりあげて、ナチの収容所の如き極限状況の中にもなお存在し得た人間の内的な偉大さを紹介している。大変感銘深い内容である。しかし、終り近く、彼は次のようなことを書いている。

十字架とか犠牲とかいう言葉が絶望のどん底で人間を希望に甦がえした（ママ）ということ、それが小説においてでなくて、ナチスの凄惨な強制収容所の中でおこったことにおどろくと共に、西欧の人物に対するキリスト教の深い感化を思わずにはおれませんでした。……イエスの名前はこの書物に一度も出てきませんが、イエスの生涯の感化の及ぶ精神の圏内でなければ、そういう転換は生じないのではないかと思つたのであります（傍点は引用者）。

ナチの収容所で虐殺され、あるいは人間外の扱いを受けた人々の大部分が、ユダヤ人であり、ユダヤ人であつたからこそであるという事実（フランクルももちろんユダヤ人）を、彼は知らなかつたのであろうか。「西欧の人間に対するキリスト教の深い感化」こそが、本意ではなかつたにせよ、一、八〇〇年にわたつてユダヤ人を迫害し続け、ナチによってであるにせよあのような大虐殺の起り得る、反ユダヤ的精神をヨーロッパに醸成したことを、彼は知らなかつたのであろうか。「イエスの生涯の感化の及ぶ精神の圏内でなければ……」とは、善きもの崇高なものはすべてキ

リスト教のものであり、それ以外にはあり得ないという、思い上りの独善以外の何物でもなからう。

私には、彼を責めるつもりは少しもないし、顧みてその資格もない。彼は、日頃から仏教、とくに禅には深い尊敬を持ち、対話を惜しまぬ心の広い宗教人であり、決して偏狭なクリスチャンではない。単に、この問題について余りに無知であり不用意であつたに過ぎない。しかし、彼をすら捉えている、このキリスト教信仰の無知と独善性は恐ろしい。

中東問題をここで論ずる意図は毛頭ない。ただ一つのことだけを指摘しておきたい。一九四七年十一月二十九日の国連総会において、いわゆる「パレスチナ分割案」が採択され、それに基いて、一九四八年にイスラエル共和国が生れた。しかし、その国家成立に至る国際政治の舞台における手順の不誠実さ、国境線の不自然さ、事後の処置に関する無責任さ、どの一つをとつても、これほど無理な国家造りは他に例が少なからう。それは、中東問題の現状が如実に物語るところである。国連およびとくに先進諸国の責任はきわめて重大であるといわねばなるまい。

もちろん、このような無理がなされた大きな要因に、例によって主として先進諸国の政治的・経済的エゴイズムが存在することは言うまでもない。しかし、同時に、とくに欧米のキリスト教国の間に、ナチのユダヤ人大虐殺事件によつて触発された、過去のユダヤ人迫害に対する罪責感と贖罪意識が働いていたことは否定し得ないであろう。贖罪は結構なことである。それ自身は崇高な行為であり、他のもろもろの醜い動機をすら浄化し得るはずのものであるかも知れない。ただ、贖罪は、あくまで自己を犠牲にすることによつて行われなければならない。しかし、実際には、キリスト教国の贖罪は、当のユダヤ人とアラブ人を犠牲にすることによつて行われたのである。

今や、欧米諸国も共産諸国も、ユダヤ人をその頭脳と経済力のゆえに、またアラブをその石油をはじめとする資源

のゆえに、認知せざるを得なくなっている。汚い放浪の民ユダヤ、砂漠の蛮族アラブとは呼ばなくなっている。そのゆえに、中東問題の解決のためには、当事者同志の話し合いのみならず、世界諸国の協調の中から、すぐれた叡知が生み出され、最大の努力が払われるに違いないと信じる。しかし、キリスト教は、依然としてユダヤ教を神に捨てられた宗教とし、イスラム教を砂漠の蛮族の宗教と見做し続けるのであろうか。

余人のことは措こう。私自身は、自分の課題として、キリスト教が本来ユダヤ教イエス派として誕生したその所にもう一度立ち帰り、どこで、何を間違ったのかを考え直してみたい。私は、イエス・キリストをわが生の根拠と信じているし、ユダヤ教徒になってあのようなシャバットやコーシエルの守り方を真似たいとは思わない。しかし、律法から自由にされたからといって、キリスト教が、律法によって生きる人々を差別し迫害する宗教であってよいはずはなく、真に律法を完成する愛の宗教でなければならぬ。私は、ユダヤ教を神に捨てられたものとする前提を再検討することにより、同じ神の正義と愛の下に生きる二つの宗教として（もちろんイスラム教や仏教とも）、平和的に共存しかつ協調し得るキリスト教神学は可能であると考えている。

私は、今回のイスラエル滞在中に、かなりの数の教授がたと面談したが、ユダヤ教側からのキリスト教学者として著名であり、イエスに関する著書も幾つかある、ダビデ・フルツサル教授とは、電話をかけてアポイントメントをとりさえすればよいように大学から手配して貰っていたが、ついに面談できなかった。私のスケジュールの問題もあったが、前述の問題についての自分の考察の整理が未だついていないという事実が、少くとも潜在意識的に、彼の面談を避けさせたのではなかったかと反省している。次に機会が与えられるならば、その時こそ、堂々と彼ともこの問題について語り合えるよう、それまでに充分準備しておきたいと願っている。

(付記)

イスラエル滞在中、念願のクムランをはじめ、マツアダ、エリコ、ベツレヘム、ヘブロン、ガリラヤ、ゴラン高原、ハイファなどの各地に旅行することができた。また、エルサレム市内のいわゆる聖跡にも何度か足を運んだ。これらについて書きたいことが無いではないが、いずれも専門的な研究目的をもって行ったことではないし、類似の紀行書や紹介も少くはないので、今回は一切触れなかった。